

## 「2017年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部4年 西村 有貴

とくに語学学習に関して、より学習意欲が高まった。今回のプログラムでは、現地の学生が日本語専攻の学生たちであったため、大学内で言葉の壁を強く感じることはなかったが、ひとたび町へ出ると、英語もスムーズには通じない世界が広がっていた。このような言葉の壁をなくすことができれば、現地の生活や文化がより見えてくるのではないかと感じられた。たった2週間ではあったが、タイでの生活が身近に感じられた2週間であり、とても有意義なものだった。ほんの少しではあるが、学んだばかりのタイ語が通じたときは大変うれしく感じられた。もしも滑らかに会話ができれば、より楽しく刺激的な滞在になったのではないかという思いが強く、語学学習への意欲が高まる結果となった。英語学習ももちろんだが、タイ語は文字から読むことができないほど初めて触れる言語であったため、店や町中などで少しずつ文字が読めるようになるのはとても楽しかった。

このプログラムをとおして、機会があればまた留学に行きたいと強く感じた。ただ現在学部4回生であり卒業後は就職が決まっているため、長期の留学をするには時期的に厳しいが、在学中に短期での留学、もしくは就職後に長期の語学留学をしたいと考えている。

また国は違えど人の生活がそこで営まれているのだという当たり前のことを改めて強く意識することができた2週間だった。特に現地の学生ととても親密な関係になることができ、授業の合間などに他愛ない会話をしているときなど、国や人種の違いなどすべて忘れてとても楽しく過ごしていた。会話の内容も、日本で自分の友人と交わす会話と大差はなく、気候や文化が違えど、変わらない人の姿を感じられてとても興味深く感じられた。

この2週間のプログラムで、現地語であるタイ語学習、アユタヤ遺跡や寺院、ニューハーフショーなどの文化見学、タイ料理作り、そして現地の学生たちとの共同発表を通じた交流を経験し、今後より一層の国際理解と語学学習に努めていきたいという思いが強まった。特にアユタヤや寺院の見学では、実際にそれらの研究をしておられる院生の方が解説をしてくださり、ただの観光ではなくとても勉強になった。また現地の学生との交流を通し、タイの若者に最近はやっているものや日ごろの学校生活など、日本には絶対にわからなかったことをたくさん学ぶことができた。

留学時点で進路が確定していたため、進路を大きく転換させる契機にはならなかったものの、東南アジア等への駐在をしたいという思いが芽生えた。卒業後に就職予定である企業はタイやベトナムにも支社を持っているため、より長期の滞在を通して現地の文化をさらに学び、現地の人々に親しまれる商品を作る仕事がしたいと感じた。